慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古代文化論(松本信廣著, 共立社發行)
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.1 (1933. 4) ,p.170- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

り、李濟氏により殷墟から實際鎔笵片の發見されしこと、かゝる推測を無效ならしむると論じ、最後に白色土器を有する殷代文化相の案外特殊的なりしこと、たゞ殷墟出土品の層序が確められず、問題の遺物をその本來の所傳と結びつけることは嚴密に云ふと一つの推測に止まるからその論述の解決は之を將來に待たなければならぬと結ばれてをる。

支那古代史の上に考古學が常に新しき啓示を齎すこと今に初まらないが、梅原氏によつて提供せられた白色土器の資料は、實に支那古代文化の解明に重要な示唆を與へて呉れる。その怪獸正面形などの如きは、著者の論ぜられる如く全く未開人の文樣を想起せしむるものであり、考古學は、此點に於て人種誌的研究と相結び、古代太平洋の文化史に一道の光明を投じて呉れるのである。傳說方面からグラネ氏などの研究は、支那人の古代文化に未開要素の存在を遺憾なく摘發し、此點支那の國粹派學者の顰蹙をかつてをるが、事實は事實で如何ともなし難い。然してこういふ未開要素の存在は、決して支那文化の本來の幼稚さを語るものでなく、たゞ却てその文化の固有性を敎ふるものである。支那文化には幾層も階段があり、さま〳〵な性質のものが存したらうと云ふことは、グ氏も推測し、今日考古學は徐々として之を檢證しつゝあるが、吾人は氣永に考古學者の提供して呉れる材料を待ち、虛心坦懷に支那古代史の再建をなすべきであらう。文獻上の先入主から、所謂支那古代文化なる概念を振りまはし、支那人西來說を信じて支那古代史を我流に組立てることなどは現在に於ては極めて戒心しなければならぬ。梅原氏の白色土器の研究は、種々なる意味に於て吾人に敎示する所多く最近支那考古學上の注目すべき大著作として弘く江湖に推薦したい。本書は、著者の古銅器研究の一部だそうであり、吾人は、氏が一日も早く本土器と關聯ある所謂三代古銅器の研究を大成せられんことを祈つてやまない。本土器の年代觀も主として古銅器との關係に於て論ぜられてをるのであり、本書の讀者は、後者の研究によつて本土器自體の問題の徹底的解明を衷心より期待して居るのである（松本信廣）。

古代文化論（松本信廣著　共立社發行）

本書の內容に就いては、著者がその序言に於て、『「古代文化論」と云ふ標題の本に支那を中心とせる東部アジアの最古代史を、晩近に於ける諸人文科學進步の光に照して記述して行きたいのが本篇の目的である。章を四つに分け、第一章「東部アジアに於ける文化の始原」は、主として考古學的研究により解明せられつゝある東亞大陸の原始時代の一端に就て述べ、第二章「言語學上より見たる東南アジア」は、古代に於て重要な活躍を演じたるオーストロアジア語族を中心として南方文化の潮流を論じ、第三章「極東神話の諸研究」は、極東の神話の研究に就ての最近學說の一端を述べ、第四章「支那古代社會に關する一管見」は、その血族團體の原始的形態に關して卑見を述べてみやうと思ふ」。』と云はれてゐることによつて、略之れを推知することが出來るのである。しかのみならず、本書中の個々の內容に就いては、既に史學雜誌（四四の二）・靑丘學叢（一〇）・民俗學（五の三）等の書評欄に、比較

的詳細に述べられてゐるのであるから、此處には重復を避けて、省略に附しやうと思ふ。要するに、第一章より第三章までは、夫々の方面に於ける最近の權威ある業績學說を網羅し、是を極めて愼重に批判しつゝ、新しい問題を讀者に示す勞をとられてゐる。第三章に於て、グラネ氏の著書に對し、公平にその短所と長所とを指摘せられたる如き、その好例である。

第四章は主として著者の支那古代社會に對する所說であつて、先づ所謂殷虛の龜甲獸骨文字の發見史を述べ、李濟・董作賓等の學術的發掘に依據し、是を以て眞に殷代の遺物と認め、その卜辭によつて、忘却されし殷時代の古代社會を再現せんと試みられてゐる。所謂龜甲獸骨文字が果して殷代の史料として認められ得べきか、なほ疑問の念を抱く人々も少くないであらうが、而も、凡べて古代史の研究がかくの如き發掘物の研究調査によつて、次第にその年代を溯り、所謂傳說時代を變じて歷史時代となすの道程を辿るべき性質のものなる以上、著者の研究はその先驅として、また意義ある企圖であらうと考へる。

次いで著者は周代の親族制を究め、ソロレート・レビレート・同姓結婚の禁止に就いて論じ、最後に支那古代の姓の研究に及んでゐる。嘗て著者は姓の問題を論じ、感生帝傳說その他により、姓の起源を以てトーテミズムによるものならんとせられたが、本書に於ては、感生傳說中、禹の話は禮緯に見えて、先秦の古書になく、契の母が玄鳥の卵を呑みて妊む話も、史記及び緯書に委しく見えて、楚辭や詩經に見ゆるのは、明瞭を缺いてゐるから、その儘に此說を採用し得ないとし、主として官名傳說により、ゴールデンワイザーのトーテミズムの定義から、トーテム氏族時代の痕跡を姓に認めてゐる。併しながら緯書の感生說を見るに、その中には五行說を含んだ一群と、然らざるものとがあるのであつて、その然らざるものは、契の母の玄鳥の話、后稷の母の大人の跡を踐んで孕む話、禹の母の薏苡を呑んで妊む話などであり、その他の話は五行說を採入れつゝ、之を敷衍したものらしいのであり、愚見を以てすれば、その間明瞭に時代の先後があるのではないかと疑はれるのである。從つて少しく不明瞭であるとは云へ、詩經にその徵證ある契や后稷の話は、やはり古いものと考へられ、後に緯書が之を採入れたに過ぎないと思はれるのであり、加藤博士の感生帝說を以て、王朝の建設者の祖先は上帝の子にして、尋常の人に非ることを示すため、造爲したものとせらるゝ所說の如きは、寧ろ緯書が感生帝說をその中に採入れた場合、又それを敷衍して新しく多くの感生帝說を作つた場合等に當てはまる說明であらう。されば、感生帝傳說も官名傳說も、共に古代支那の姓がトーテム氏族時代の痕跡を有することを示すものとして認められ得るのではあるまいか。何れにせよ、支那古代に於けるトーテミズム存否の問題に關する著者の努力は、我が東洋史學界に對する重要なる貢獻として推奬すべき業績であり、我等後進の常に敬服惟重するところである。

要するに、本書は古代文化の研究に志すものが、必ず一讀すべき好著であり、同時に明敏なる著者の將來を卜すべき業績として、敢て江湖に薦むると共に、また之によりて著者の他日の大成を翹望期待するもの、決して筆者一人に非ざるべきを信ずる。(杉本忠)